

唐船

古名

祖慶官人

吉広作

ワキ

箱崎殿

ツレ（二人） 唐子

シテ 祖慶官人

子方（三人） 日本子

地は 筑前

季は 七月

「かやうに候ふ者は。九州箱崎の何某にて候。さて
も一年唐と日本の船の争ひあつて。日本の船をば唐
にとゞめ。唐の船をば日本にとゞめ置きて候。某
も船を一艘とゞめ置きて候。其船に祖慶官人と申
す者をとゞめ置きて候ふが。はや十三回に為り候。
某は牛馬をあまた持ちて候ふ程に。彼祖慶官人に
申しつけ野飼をさせ候。今日も申しつけばやと存
じ候。

唐子二人一声

「唐船の楫枕。夢路ほどなき名残かな。

ソンシサシ

「是は唐明州の津に。そんしそうと申す兄弟の者
なり。

二人 「さても我父官人は。一年日本の賊船にとらはれ。

昨日今日とは思へども。十三回に早なりぬ。余り
に父の恋しさに。いまだ此世にましまさば。今一
度対面申さんと。

下歌 「思ひ立つ日を吉日と。船の纜解き始め。

上歌

「明州河を押し渡り。 く。 海漫々と漕ぎ行けば。

はや日の本もほの見えて。 心づくしの果にある。

忍びし妻を松浦潟。 波路はるかに行く程に。 名

にのみ聞きし筑紫路や。 箱崎に早く着きにけり。

く。

ワキ詞 「唐の人のわたり候ふか。

ソンシ詞 「是に候。 祖慶官人いまだ存生にて。 箱崎殿に召し使はれ候ふ由承り候ふ程に。 数の宝に換へ連れて

帰国仕るべき為めに。 唯今此所に渡りて候。

ワキ 「さん候。 祖慶官人は未だ存生にて候。 唯今物詣とて御出で候。 暫くそれに御待ち候へ。 御帰り候はゞ引き逢はせ申し候ふべし。

ソンシ 「さらば是に待ち申さうするにて候。

シテサシ 「如何にあれなる童部ども。 野飼の牛を集つゝ。 早々家路に急ぐべし。

日本子二人 「かゝる業こそ物うけれ。

シテ「よし我のみか天の原。

一声「七夕の。たとへにも似ぬ身のわざの。

三人「牛牽く星の名ぞしるき。

日本子二人「秋咲く花の野飼こそ。

三人「老の心の慰めなれ。

シテ「是は唐明州の津に。祖慶官人と申す者なり。我々からざるに日本に渡り。牛馬をあつかひ草刈笛の。高麗唐をば名にのみ聞きて過ぎし身の。あら故郷

恋しや。

詞「かくて年月を送る程に二人の子を持つ。又唐にも二人の子あり。彼等が事を思ふ時は。それも恋しく。又これもいとほしゝ。一方ならぬ箱崎の。二人の子供なかりせば。老木の枝は雪折れて。此身の果は如何ならん。

地「あれを見よ。野飼の牛の声々に。く。子故に物や思ふらん。況んや人倫に於てをや。我身ながら

も愚なり。く。いざや家路に帰らん。く。

「如何に父御よ聞こしめせ。さて住み給ふ唐に。牛馬をば飼やらん。御物語り候へ。

シテ「中々なれや唐の。華山には馬を放し。桃林に牛をつなぐ。是花の名所なり。

日本子二人「さて唐と日の本は。いづれまさりの国やらん。委しく語り給へや。

シテ「愚なりとよ唐に。日の本をたとふれば。唯今尉が

牽いて行く。九牛が一毛よ。

日本子二人「さほど楽しむ国ならば。痛はしやさこそ實に。恋しく思し召すらめ。

シテ「いやとよ方々を。設けて後は唐衣。帰國の事も思はずと。

地「語りなぐさみ行く程に。嵐の音の少なきは。松原や末になりぬらん。箱崎に早く着きにけり。く。

「いかに祖慶官人。何とて遅く帰りてあるぞ。

シテ詞
「さん候余りに多き牛馬にて御座候ふ程に。さて遅く罷り歸りて候。

ワキ 「尤にて候。又尋ぬべき事の候ふ隠さず申すべきか。

シテ 「是は今めかしき事を承り候ふ物かな。何事にてもあれ申し上げうずるにて候。

ワキ 「さて御事は唐に一人の子を持ちてあるか。

シテ 「さん候子を二人もちて候。

ワキ 「其名をそんしそうと申すか。

シテ 「あら不思議や。何とて知ろしめされて候ふぞ左様に申し候。

ワキ 「其そんしそう。汝未だ存生の由を聞き。数の宝に易へ連れて帰国すべき為めに。只今此所に渡りて候。

シテ 「是は思ひもよらぬ事にて候ふ物かな。さて其船はいづくに御座候ふぞ。

ワキ 「此方へ来り候へ。あれに繋かりたる船こそ。彼両

人の船にて候へ。

シテ「実にこれは某が船にて候。

ワキ「さらば対面し候へ。

シテ「余りに見苦しく候ふ程に。引き繕ひて賜はり候へ。

ワキ「心得申し候。

シテ詞「やあいかにあれなるは唐にとゞめ置きたる二人の者か。

唐子二人「さん候童名そんしそいうなり。

シテ「是は夢かや夢ならば。

唐子二人「所は箱崎。

シテ「明けやせん。

地「春宵一刻其価。千金も何ならず。子ほどの宝よもあらじ。唐は心なき。夷の国と聞きつるに。かほどの孝子ありけるよと。日本人も隨喜せり。尊と

や箱崎の。神も納受し給ふか。

ソンシ詞「如何に申し候。追風が下りて候ふ急ぎ御船に召さ

シテ詞
れ候へ。

「いかに箱崎殿へ申し候。追風がおりて候ふ程に船に乗れと申し候。御暇申し候ふべし。

ワキ
「めでたうやがて御帰国候へ。

日本子二人詞
「あら悲しや我等をも連れて御出で候へ。

シテ
「げに／＼出船の習ひとてはたと忘れてあるぞ此方へ來り候へ。

ワキ
「暫く。祖慶官人の事は力なき事。此をさなき者ど

もは。此所にて生まれ相続の者にて候ふ程に。いつまでも某召し使はうづるにてあるぞ。此方へ來り候へ。

日本子二人
「あら情なの御事や。大和撫子の花だにも。同じ種とて唐の。唐紅に咲く物を。薄くも濃くも花は花。情なくこそ候へとよ。

唐子二人
「時刻うつりて叶ふまじ。急ぎ御船に召されよと。はや纜を疾くくと。

シテ 「呼ぶ子もあれば。

日本子二人 シテ 「取り留むる。

シテ 「中にとゞまる。

唐子 「父ひとり。

地 「たづきも知らず泣き居たり。身もがな二つ箱崎の。
恨めしの心づくしや。たとへば親の子を思ふ事。
人倫に限らず。焼野の雉夜の鶴。梁の燕も。皆子
故こそ物思へ。

クセ 「況んや我らさなきだに。明日をも知らぬ老の身の。
子故に消えん命は。何中々に惜しからじと。

シテ 「今は思へばとにかくに。

地 「船にも乗るまじ留まるまじと。巖にあがりて十念
し。既に憂き身を投げんとす。唐や日の本の。子
供は左右に取りつきて。これを如何にと悲しめば。
さすが心もよわくと。為り行く事ぞ悲しき。

「よくく物を案ずるに。物のあはれを知らざる

は。唯木石に異ならず。殊更出船の障なれば。

はやく暇とらするぞ。とくく帰国を急ぐべし。

シテ詞
「余りの事の不思議さに。更に誠と思はれず。

ワキ
「こはそも何の疑ひぞや。当社八幡も御知見あれ。

偽り更にあるべからず。とくく船に乗り給へ。

シテ
「これは誠か。

ワキ
「中々に。

地
「ありがたの御事や。誠に諸天納受して。此子を我

等に。あたへ給ふか有難や。斯くて余りのうれしさに。時刻を移さず。暇申して唐人は。船に取り乗り押し出だす。悦びの余りにや。樂を奏し舟子ども。棹のさす手も舞の袖。をりから波の鼓の。舞樂につれて面白や。 (樂)

地
「陸には舞樂に乗じつゝ。く。名残おして海面遠く。なりゆくまゝに。招くも追風。船には舞の。袖の羽風も追風とやならん。帆を引きつれて舟子

ども。帆を引きつれて舟子どもは。悦び勇みて。
唐さしてぞ急ぎける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈第四輯」大和田建樹著